

令和 8 年度 長野県 英語教育改善プラン

目標

CAN-DOリストを活用して領域ごとの達成状況を丁寧に把握し、指導と評価の一体化を促進する。言語活動の目的を明確にし、児童が「できた」「伝わった」と実感できる授業づくりを進める。

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☐ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ① CAN-DOリストの設定状況について、改善が見られる。
(参考：R5：76.1%)
- ② 児童の英語による言語活動（授業の50%以上）は増加した。
(参考：R5：93.4%)

未だ改善が必要な点

- ① R5・6 全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果（(61)英語の勉強は好きですか等）から、児童の英語学習に対する興味・関心について課題が見られる。
((61)R5:68.8%⇒R6:68.1%)
- ② CAN-DOリストの活用状況について、改善傾向であるが、さらに改善の余地がある。
【公表】R5：59.3%
【把握】R5：39.9%

2. 要因分析

- ① 学校訪問や出前講座等で、指導主事がCAN-DOリストに基づいた単元づくりについて助言し、伴走支援をしてきたことで、CAN-DOリストの設定が定着したと考えられる。
- ② 郡市ごとや学校ごとの研修会等で、外国語の学習過程についてスライドを用いて扱ったことで、単元や1時間の授業における言語活動を通した指導の具体的なイメージをもつことができたと考えられる。

- ① 児童の英語学習に対する興味・関心について、言語活動の目的等が明確でないために、児童が「できた」「伝わった」と感じる成功体験につながりにくくなっていることが考えられる。
- ② CAN-DOリストの活用状況の課題について、資質・能力の育成を目指した指導と評価の一体化の学校での捉え方に課題があると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①② CAN-DOリスト活用の促進
 - ・英語専科教員による校内研修の充実と専門性向上のため、オンライン研修を実施。1回の研修時間を短くし、年3回の実施にすることで多くの教員が参加できるようにする。（参加対象：小・中・高の教員）
5月15日（金）講義「発達段階を踏まえた外国語指導の在り方」
7月9日（木）講義「教室で英語を使う力と児童のモデルとなる発信力」
10月16日（金）実践発表「思考力・判断力・表現力を高めるための授業デザインと評価の工夫 等」
 - ・小学校「外国語活動・外国語」出前講座を実施し、各学校のニーズや課題に合わせ、CAN-DOリストの見直しや、指導と評価の一体化等について対応する。
- ① 「英語が好き！もっと挑戦してみたい！」を応援
 - ・小・中学生対象のグローバル体験キャンプを年1回開催し、ゲームやアクティビティ等を実施。
 - ・小・中学生を対象とした「一日海外留学疑似体験」を実施。
小・中学生に、英語による実際のコミュニケーションを行う機会を提供する。
- ② 指導力等の向上
 - ・小学校教員の新規採用において、加点制度を導入。（実用英語技能検定準1級又は相当（TOEFL iBT80 点以上、TOEIC 730 点以上）の資格取得者）。

参考URL：

(<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/kyoshokuin/shiryo/gaikokugokyoiku.html#eigoryoku>)

(<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/astra.html>)

令和 8 年度 長野県 英語教育改善プラン

目標

「目指す姿に到達するための逆算的な単元構想」と「学習過程を意識した授業づくり」を基盤に、技能統合型の言語活動を充実させ、資質・能力の育成を図る。

○CEFRA1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R7：55.5%⇒R8：57.0%）

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☐ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ① CEFRA A1レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒の割合について、向上が見られる。
(R6:54.7⇒R7:55.5%)
- ② 学習者用デジタル教科書等について授業における活用状況の向上が見られる。
(R6:89.6%⇒R7:94.0%)

未だ改善が必要な点

- ① AI、ICTの活用については、工夫の余地がある。
・発話や発音などの録音・録画を実施した学校の割合は改善の余地がある。
(R7:86.3%)
・オンライン会話（遠隔地の生徒や教師、ALT等と英語で話す交流等）を実施した学校の割合は改善の余地がある。
(R7:23.6%)

2. 要因分析

- ① CAN-DOリストを基にした到達目標の設定が定着してきたと考えられる。また、学校訪問や研修会等において外国語の学習過程について扱ったことで、単元や1時間の授業における言語活動を通した指導の具体的なイメージをもつことができたと考えられる。
- ② 各種研修や出前講座等でのデジタル教科書活用例の共有により、ICT活用が促進された。

- ① オンライン会話や遠隔交流は、通信環境や外部との連携など考慮すべき事が複数あることから、実施状況に差が生じたものと思われる。また、研修が基礎的ICT活用に偏り、オンライン交流等の具体的な実施方法が十分に理解されていないことも考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ① 指導と評価の一体化に関する理解の促進
・授業改善実践校による、「目指す姿に到達するための逆算的な単元構想による授業」「学習過程を意識した授業づくり」の実践。
・各地区指導主事が各校の取組に伴走。総合教育センターの研修講座において実践発表を行う。（小中高の教員が参加）
・H31、R5に作成・改訂を行った「テスト改善ハンドブック」について、R8全国学力・学習状況調査の問題等を参考に、資質・能力を測る問題を追加し、校内で実施するテストまで見通した単元づくりの例を県内に広める。
- ①② ICTやAI活用の促進
・中学校「外国語」出前講座を実施。各学校のニーズや課題に合わせ、言語活動の充実やCAN-DOリストを活用した目標達成状況の把握についてや、ICT活用について指導主事が共に考え、実践の工夫につなげられるようにする。
- ②① 英語を使う機会の提供・オンライン交流・遠隔地との共同学習の推進
・小学校と同様、小・中学生対象のグローバル体験キャンプを年1回開催し、ゲームやアクティビティ等を実施。
・小・中学生を対象とした「一日海外留学疑似体験」を実施。
小・中学生に、英語による実際のコミュニケーションを行う機会を提供する。
・“本物の言語環境”を日常の学習に取り入れるため、海外とのオンライン交流を推進する。

令和 8 年度【長野県】英語教育改善プラン

CAN-DOリストによる学びの可視化と、ALTとの効果的なチームティーチングを通じて、授業内外における生徒の言語活動を高度化と機会の充実を図り、発信力を強化する。

○CEFRA2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7: A2以上 53.2%、B1以上 22.6% ⇒ R8: A2以上 56%、B1以上 27%)

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☐ 校種間連携 ☒ ALTの参画 ☒ ICTの活用 ☐ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

目標

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合：R6年度48.3%からR7年度53.2%へと上昇し、着実な改善が見られる。

②CEFRB1相当以上の生徒の割合：R6年度20.8%から22.6%へ増加。改善の傾向が見られる。

③教員が発話の50%以上を英語で行っている学校の割合：R6年度43.7%から49.7%へと上昇。特に論理・表現における数値に改善の傾向がみられる。(論表I～III平均 R6:20.7%⇒R7:30.3%)

①生徒の英語力 (B1以上) の伸び悩み：R7年度の達成値 22.6%は前年度からは改善されたものの、目標値 24%を下回っている。

②教員の授業内英語使用状況：発話の英語使用割合 (R7年度 49.7%) は改善傾向にあるが、50%の目標は未達であり、75%以上は 7.6%にとどまっている。

③ALT等の参画とICT機器活用：ALTの参画 (普通科5.7%、専門・総合5.4%) 及び発信領域における ICT活用 (22.4%) の充実が必要である。

2. 要因分析

① 言語活動の定着と指導・評価の一体化の推進により、「英語で何ができるか」を具体化でき、教師の見取りの精度向上につながった。

② グローバル人材育成に向けた教育活動の充実により、言語活動の質の向上と生徒の表現力が高まり、理由や具体例を伴って継続的にやり取りできるB1層の生徒の増加につながったと考えられる。

③ ALTの増員による効果的なチームティーチングとパフォーマンステスト (R6実施率85%) の充実により、アウトプット重視の指導が進展した効果であると考えられる。

①言語活動の充実により、生徒の英語力は改善傾向ではある一方、特にB1レベル以上の育成に必要な、即興で自分の考えを表現する活動や、まとまりのある発話を行う機会が不足していることが要因と考えられる。

②③ALTの増員 (R6: 43名⇒R7: 52名) が図られたものの、通常授業における活用には課題があり、役割分担や評価参画、ALTとJTEの協働による言語活動中心の授業設計・個別指導に位置付けた活用モデルが十分に確立されていない。また、ICT活用も限定的であり、思考力・判断力・表現力の育成につながる実践が十分ではない。

3. 目標を達成するための施策・事業

①②①② CAN-DOリスト活用による学びの可視化・指導と評価の一体化の更なる推進
言語活動の質的向上に向け、CAN-DOリストを活用し、学びの可視化と指導・評価の一体化を推進する。単元計画から評価・振り返りまで一体的に運用し、「英語で何ができるようになるか」を明確にするとともに、自己・相互評価による学習改善を促進する。

【具体的取組】
教育課程研究委員会外国語分科会 (通年)、長野県教育課程研究協議会 (10月、県内4地区)

①②③ ①②③ ALTとの協働によるチームティーチングの高度化と言語活動の充実
ALTの活用及びチームティーチングの高度化を通して、言語活動の質的向上を図る。具体的には、ALTを「言語モデル」に加え、言語活動のパートナー及び評価の担い手として位置付け、単元計画段階からの協働 (チームティーチング設計) の推進を図るとともに、ALTとの自然な英語によるやり取りを授業内に位置付ける。「ALTとの効果的な協働」を重点テーマとした教員研修を実施する。

【具体的取組】
英語教員対象アプススキル研修 (年5回予定)、長野県高等学校英語教育研究会 (ETAN) 合同研究会 (8月)、外国語指導助手指導力等向上研修 (11月)、英語教育探究フロンティア事業 (通年)

①③ 発信力強化・グローバル人材育成によるCEFRB1層の生徒の育成
・発信力の強化とグローバル人材の育成により、A2層の底上げとB1以上の生徒の育成を推進する。即興発話や意見表明、理由や具体例を伴った表現活動の充実に加え、英語による探究活動や発表機会の拡充 (WWL拠点校、SSH指定校等との連携) を進める。
・海外研修や国際交流等を通じて実践的な英語活用の機会を提供するとともに、これらの取組を教員の指定研修として位置付け、指導力の向上を図る。さらに、ICT及びAIの活用による生徒の英語発信力向上に資する実証研究を実施する。
・4技能に対応した高度な言語活動の授業を実践するためネイティブ英語教員選考を実施する。

【具体的取組】
高校生サミット (WWL拠点校6月)、サイエンスフェア (SSH指定校7月) の実施、グローバルリーダー育成海外研修 (アメリカ8月) 信州つばさプロジェクト (高校生海外留学支援) (韓国、アメリカ、マレーシア、台湾 10月～3月)、台湾・オーストラリア等との国際交流 (通年)、教員向けアカデミックプレゼンテーション研修 (9月)、ネイティブ英語教員選考

長野県教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)		52	51.1	54	48.3	52	53.2	56		60	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)		25	21.2	25	20.8	24	22.6	27		30	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)		60	66.8	68	65.9	70		72		74	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合(%)		68	81	83	79.6	85		87		89	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100	100		100		100		100	
		公表(%)	100	94.8	100		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	80	92.7	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)		90	92.1	92.2	92.3	92.3	93.7	94		94	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合(%)		80	48.2	50	43.7	50	49.7	60		70	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)		50	43.5	50	54.7	55	55.5	57		60	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合(%)		100	89.4	100		100		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合(%)		90	75	90		90		90		90	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	100	100	100		100		100		100	
		公表(%)	100	65.6	100		100		100		100	
		達成状況の把握(%)	100	82	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合(%)		50	45	50	41.1	52	61.7	54		56	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合(%)		100	84.5	100		100		100		100	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定(%)	75	76.1	80		82		84		86	
		公表(%)	75	39.9	75		75		77		80	
		達成状況の把握(%)	75	59.3	75		75		77		80	